

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370220

研究課題名(和文) 戦後沖縄文学に関する思想史的研究

研究課題名(英文) a study of the thought on okinawa literature after World War II

研究代表者

新城 郁夫 (Shinjo, Ikuo)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：10284944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題における最大の成果は、学術単著『沖縄の傷という回路』(岩波書店、2014年)である。この本は、すでに「沖縄タイムス」や『月刊みずす』『図書新聞』等のレビューで高い評価を受けている。加えて、この本以外の成果として、論文「「掟の門前」に座り込む人々」(『現代思想』2014年10月号)や『日本占領再編ツールとしての沖縄返還』(同2015年8月号)等の8本の論文そして国際学術シンポジウムを含む6回の口頭発表を行った。これらの研究により、戦後沖縄文学の思想史的可能性を、とくに軍事覇権への抵抗思想による共同性の構築とい点において明らかにし得た点に、本研究の成果の核心が示されている。

研究成果の概要(英文)：The biggest result in this research is "circuit the wound of Okinawa" (Iwanami Shoten, 2014). This book has already received a high evaluation in the reviews such as Okinawa times or "Misuzu Publishing" "book newspapers". As result after the publication of this book, there are articles such as "person sitting down in the gate of rules" or "the Okinawa return as the reorganization tool of the occupation in Japan". In addition, I presented six times of international academic symposiums. In brief, this study proved possibility of the Okinawa literature on thought. In addition, I showed the ethics of the community which a peace movement made in Okinawa .

研究分野：日本文学

キーワード：沖縄 思想史 ポストコロニアル 戦後 岡本恵徳 阿波根昌鴻 ジェンダー 占領

1. 研究開始当初の背景

戦後沖縄文学に関する研究は、岡本恵徳と仲程昌徳という二人の先駆者によってその研究の基礎が築かれた。たとえば岡本の『現代沖縄の文学と思想』(1981年)や『現代文学にみる沖縄の自画像』(1996年)あるいは仲程の『沖縄文学論の方法』(1987年)や『沖縄文学の諸相』(2010年)といった研究は、戦後沖縄文学における戦争の表象や、米軍占領及び「日本復帰」に関わる社会的政治的葛藤の文学的形象化の問題を、実証的かつ総合的に文学史的流のなかに位置づけた重要な成果と言える。

こうした研究を受けて、里原昭『琉球弧の文学 - 大城立裕の世界』(1992年)やスーザン・ブーテレイ『目取真俊の世界』(2011年)といった個別作家論、あるいはマイク・モラスキー『占領の記憶 / 記憶の占領』(原著 1998年、鈴木直子による日本語翻訳は2006年)や Davinder L. Bhowmik “*Writing Okinawa*” (2008年)あるいは仲里効『悲しき垂言語帯 - 沖縄・交差する植民地主義』(2012年)などにおいて、米軍占領下そして「日本復帰」後の沖縄人アイデンティティの形成や日本語と琉球語との葛藤を読み解いていく文化研究的アプローチによる考察が積み重ねられてきた。しかし、小説を中心とする戦後沖縄文学に関する文化研究的盛行の一方で、たとえば牧港篤三や米須興文や長堂英吉あるいは中屋幸吉や清田政信や岡本恵徳といった詩や批評をはじめとする多様なジャンルにわたる沖縄の表現者たち、そして中野重治や大江健三郎あるいは中野好夫や津野創一といった、本土にあって持続的に沖縄に関わる表現を展開していた文学者たちの戦後沖縄に関する文学表現は、本格的な研究がなされてこなかった。

これを踏まえていえば、これまで戦後沖縄文学は、日本近現代文学を相対化する鏡のような機能を果たす媒体として研究され、独自の歴史と社会編成を持つ沖縄の歴史的状況の政治的状況を反映する、特異な地方文学として読まれ論じられる傾向にあった。こうした研究が、戦後沖縄文学の特異性を明らかにしてきた点が重要な意義を持つことは確かである。しかしその際、文学表現と思想性とくに政治思想とは分離され、研究においても棲み分けがあった。結果、思想史的観点から戦後沖縄文学総体にアプローチしていく研究はほとんどなく、戦後日本思想の枠組みを差異化していく可能性を持つ戦後沖縄文学の特質は十分に考察されてこなかった。

この点、本研究は、戦後沖縄文学を、思想的可能性という視点から考察することにより、社会や政治状況に対して鋭敏な批判的介入を遂げてきた戦後沖縄文学の特質を検証する営みにおいて、既存研究にはない

独自性を持つ。特に植民地的状況下における沖縄の人々による政治主体化の模索や、出自や人種・民族的差異性を背景に持つ人々が共生していく共同性を想像し表象していく可能性に焦点を当てて戦後沖縄文学を総合的視野から考察していく本研究は、日本戦後文学の傍流というに枠に留まらない戦後沖縄文学の多様性を明らかにしていくことができた。

こうした研究の展開により、戦後日本文学の枠組みそのものを根底から組み換え、戦後思想史研究の領域に新しい視点をもたらす戦後沖縄文学の思想的可能性と思想史的特質が明らかにしていこうとした。それが研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後沖縄文学を思想史という視点から考察し、戦後沖縄文学が持つ思想的可能性と独自性を明らかにする点にあった。戦後沖縄文学は、近年、日本文学研究のなかで、多言語表現の特異性や植民地的政治性の顕在化といった特質において、ポストコロニアル文学として注目を集めるようになり、優れた研究が積み重ねられてきた。

しかし、その思想的可能性と思想史的位置づけに関しては、未だ十分な研究がなされていない。こうした研究状況において、『鹿野政直思想史論集第三、四巻』(2008年)及び同氏の『沖縄の戦後思想を考える』(2011年)が開いた研究の地平は、本研究の見通しに大きな示唆を与えた。

鹿野の研究は、戦後沖縄思想史のなかで戦後沖縄文学を積極的に位置づける考察として重要な意義を持つ。ただその研究は、大城立裕論や雑誌『琉大文学』の史的考察等の個別研究に留まり、「なぜ戦後沖縄の思想は文学に代表されるのか」という鹿野による根源的な問いは未解決のまま残されている。本研究は、この根源的な問いを解明しようとするものであり、戦後沖縄文学を思想的可能性において捉え、その達成を思想史的に位置づけることが、中心的な目的となる。

そこで本研究では、日本とアメリカの間にあって軍事的植民地とされてきた戦後沖縄における文学が、国民国家的思考の規範を揺さぶり、日本(文学)という枠組みを脱構築していく思想的可能性を持つことを検証した。その際、特に、植民地的社会状況下における政治的主体化と多文化的共生への模索という点に焦点を当てて考察を進め、戦後沖縄の思想的可能性および思想史的特質を明らかにしていくところに、本研究の中心的な目的があった。

3. 研究の方法

戦後沖縄文学関連資料及び戦後沖縄思想関連資料を調査収集し、その成果を順次データベース化していく。そのさい、主として戦後沖縄における小説や詩作品など文学関連資料と日本本土での文学関連資料とこれらの資料収集と併行して、特に戦後思想史の観点から重要と考えられる関連資料の調査収集に力を入れ、戦後沖縄と戦後日本双方の思想関連文献を積極的に調査収集対象とした。

調査収集される資料は膨大な量になるので、分析にあたっては、米軍占領軍政下の検閲あるいは選挙権や裁判権の限定など具体的な人権侵害と軍事植民地状況下においてつづけた沖縄の人々の、政治的主体化への模索が小説や詩作品あるいは批評といった文学形式において、いかに表出され思想的可能性を持つにいたったかという点が何よりも優先された。

上記のような方法意識を踏まえつつ、戦後沖縄文学作品における「沖縄人」意識の分裂的位相や、沖縄文化への評価軸設定と日本人という主体意識の葛藤などについて資料収集と論文化を推敲した。また、岡本恵徳や阿波根昌鴻あるいは中野重治や大江健三郎らの表現に、戦後日本文学が有するナショナル・ヒストリーの枠組みを解体していく戦後沖縄文学が持つ思想的可能性を検証した。

4. 研究成果

本研究課題における最大の成果は、学術単書『沖縄の傷という回路』（岩波書店、2014年）である。この本は、すでに「沖縄タイムス」や『月刊みずす』『図書新聞』等のレビューで高い評価を受けている。

ここに収録されたなかで、「序章 生のほうへ」は初出論文であるが、この論文では、崎山多美、屋嘉比収、岡本恵徳、阿波根昌鴻といった、戦後沖縄文学及び思想における最重要表現者の思想的作品をおそらくは研究史として初めて関連づけることに成功し、平和思想と非暴力抵抗の思想を、共同性の倫理的条件を更新させていく力として明かにしてこれを戦後沖縄思想史のなかに位置づけた。

同時に、中屋幸吉や山城知佳子といったこれまでほとんど研究対象とされてこなかった、極めて重要な表現者たち、あるいは高橋悠治や李静和といった表現者の沖縄に関するテクストをやはりおそらくは初めて繋げて論じる論考を発表し得た。本研究は、戦後沖縄文学を思想史的視座から問い直し、その表現史的可能性

を考察するものだが、本著は、その研究の成果の核心を部分を、共生思想と文学における暴力批判論の地平において明らかにしえ点で、今後の4研究史への貢献を為し得たものと言えるだろう。

加えて、この本以外の成果として、論文「『掟の門前』に座り込む人」(『現代思想』2014年11月号)や『日本占領再編ツールとしての沖縄返還』(同2015年8月号)を始めとして多数の論文そして広島ジェンダー・フォーラムや現代アジア会議等の国際学術シンポジウムを含む多数の学術会議で口頭発表を行った。

これらの研究により、戦後沖縄文学の思想史的可能性を、とくに軍事覇権への抵抗思想による共同性の構築という点において明らかにし得た点に、本研究の成果の核心が示されおり、既にこれらは、他の研究者の論文等でたびたび引用されており、研究環境への貢献もなしえていると言えるだろう。

本研究は、戦後沖縄文学を、思想的可能性という視点から考察することにより、社会や政治状況に対して鋭敏な批判的介入を遂げてきた戦後沖縄文学の特質を検証する営みにおいて、既存研究にはない独自性を持つ。特に植民地的状況下における沖縄の人々による政治主体化の模索や、出自や人種・民族的差異性を背景に持つ人々が共生していく共同性を想像し表象していく可能性に焦点を当てて戦後沖縄文学を総合的視野から考察していく本研究は、日本戦後文学の傍流というに枠に留まらない戦後沖縄文学の多様性を明らかにした。こうした研究の展開により、戦後日本文学の枠組みそのものを根底から組み換え、戦後思想史研究の領域に新しい視点をもたらす戦後沖縄文学の思想的可能性と思想史的特質を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

1. 新城郁夫. 倫理としての辺野古反基地運動：辺野古から嘉手納、宮古、八重山へ. 現代思想 44(2) (通号 臨増) p.120-128 . 2016. 査読無
2. 新城郁夫. 日本占領再編ツールとしての沖縄返還 . 現代思想 43(12) p.87-97. 2015. 査読無
3. 新城郁夫. パッシング映画のなかの高倉健 - 『ブラックレイン』覚書. コリイカ.

47(2) (通号 656) p.184-192.2015.査読無

4. 新城郁夫.「掟の門前」に座り込む人々：非暴力抵抗における「沖縄」という回路（特集 戦争の正体：虐殺のポリティカルエコノミー）. 現代思想 42(15) . p.222-232 .2014.査読無

5.新城郁夫.生のほうへ.沖縄の傷という回路.岩波書店.1-31頁.2014.査読無

6. 新城郁夫.憲法試案という企てと脱国家 沖縄と広島と難民 . 年報カルチュラルスタディーズ = The annual review of cultural studies 1 . p.51-62 .2013.査読有

7. 新城郁夫.脱国家のジェンダー・ポリテイクス.言葉が生まれる、言葉を生む：カルチュラル・タイフーン 2012 in 広島ジェンダー・フェミニズム篇 .ひろしま女性学研究所 編集 ひろしま女性学研究所 (hiroshimas・1000 シリーズ；17). P34-48.2013.査読無

8.新城郁夫.独立論から独立し、共生社会を構想すること.第5回東アジア批判的雑誌会議資料集・連動する東アジア. P137-146.2013.査読無

〔学会発表〕(計6件)

1.新城郁夫.阿波根昌鴻『人間のすんでいる島』を読む.アジア現代思想沖縄シンポジウム.沖縄大学.2015/11/13.

2.新城郁夫.消化しきれないものの体内化をめぐる一岡本恵徳を読む.岡本恵徳を想うシンポジウム.成蹊大学.2014/12/5.

3.新城郁夫.沖縄の被爆者.広島ジェンダー国際フォーラム.広島留学生会館.2015/12/18.

4.新城郁夫.沖縄の思想とアート.国際カルチュラル・タイフーン・シンポジウム.国際基督教大学.2014/6/28.

5. 新城郁夫.民族文学を男女の愛で語ることの問題と、アメリカ覇権下の東アジアでパレスティナ文学を語ることの可能性.現代アジア思想会議.中国中央美術大学.2014/3/29.北京、中華人民共和国

6. 新城郁夫.独立論から独立し、共生社会を構想すること.ソウル大学統一平和

研究所主催講演会.ソウル大学.2013/8/29.ソウル、大韓民国

〔図書〕(計2件)

1.新城郁夫.沖縄の傷という回路.岩波書店.2014.全213頁.

2.新城郁夫.鷹野隆大.まなざしに触れる.水声社.2014年.著作中全文にあたる50頁担当.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

新城郁夫 (Shinjo Ikuo)
琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：10284944